みずひき草　『新墾』69-1号

夏畢る光のなかにいちずなる紅を結びてみづひき草揺るる

鍵穴より覗く家内の暗がりに敢えて確かめむみづからの不在

ふたりゐてながき沈黙の夜を持つ互みに語彙の乏しき理解

霜枯るる藤棚の闇にはからずも出遇ふ懼れは死者より生者

終の日はガラスの柩に運ばれむひと生の辱は曝すほかなく